

令和 元年 6 月 25 日現在

機関番号：14303

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2018

課題番号：15KK0037

研究課題名（和文）やまと絵の場と機能をめぐる受容美学的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）A Reception Study on Yamato-e: Its Audience and Function(Fostering Joint International Research)

研究代表者

井戸 美里（ID0, MISATO）

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・講師

研究者番号：90704510

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,800,000円

渡航期間： 8ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究では、「日本的なるもの」として受容されてきた大画面のやまと絵について、その享受された場や機能について再検討するもので「若手研究（B）」と並行して行ってきた。特に、国際共同研究で力点を置いたのは、中国に起源を持ちながらも、金屏風という形式に変容を遂げて日本的な風土に根付いてきた花鳥画である。近代に至ってこのような花鳥画が依然として日本を代表する主題として中国や朝鮮へ献上されていた実態を現存作品と記録の双方から把握するとともに、共同研究の過程において、もともと朝鮮の宮殿の一部であったと推測される、日本の金屏風の技法を取り込んだ花鳥画を新たに見出すことができたことがもっとも大きな成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

最終年度は、世界でも最大規模の東アジア研究を行う研究機関であるハーバード・イェンチン研究所において、東アジアのなかで展開してきた日本の美術についてグローバルな環境の中で在外研究を行う機会を得た。本国際共同研究の最大の意義は、東アジアに共有される主題である花鳥画の遺品を、米国での在外研究を通して国際共同研究者とともに調査できたことであり、その結果、東アジアにおける古くからの交流を通して影響し合ってきた花鳥画の証ともいえる複合的な要素をもつ、朝鮮の宮廷絵画を新たに見出すことができたことにより、東アジア絵画史上重要な作品を修復・公開へ導くとともに、東アジアの近代の美術交流の研究史に貢献したと考える。

研究成果の概要（英文）：This international joint-research explored how screen paintings depicted in Japanese-style (Yamato-e) appreciated not only inside of Japan but also in other East Asian countries in modern era. What was emphasized in this research project is that how the bird-and-flower paintings which were originated in China, were developed in Japan as gilded screen paintings and had been dedicated to the Chinese and Korean courts. By exploring the style, techniques, and motifs of the newly found folding screens which were supposed to have been used in Korean court, I pointed out that traditional quality of the bird-and-flower paintings were reinterpreted as "oriental painting" rooted in an East Asian common ground.

研究分野：人文学

キーワード：屏風 和歌 やまと絵 屏風歌 名所 庭園 日本画 花鳥画

## 1. 研究開始当初の背景

本研究で対象とする「やまと絵」は、「唐絵」の対概念として、日本的な主題を描く作品であり、和歌の世界とも関わりながら数多くの屏風絵を生み出してきたことが文献上は明らかであるものの、現存しているのはほとんど室町時代以降の作品である。水墨画が盛行していた室町時代において、次々に発見されているやまと絵屏風の現存作例は先行研究においても注目されてきたが、未だどのようなジャンルや画題の作品が、どのような空間で使用され、どのような役割と機能を持っていたのかという考察は十分に行われてきていないとは言えない。こうした感心から、科研費補助金のスタート支援「屏風絵と儀礼に関する空間的研究 東アジア的視点から」(-2014)においては、米国に所蔵される多くの屏風絵のコレクションの調査を行ってきた。東アジア文化圏に共通する絵画の主題(たとえば、儒教的な主題や花鳥などのモチーフ)がいかに広く普及しており、日本においてはその影響を受けつつも、いかにやまと絵として変容を遂げたのか、ということを追究した。こうしたなかで、日本的な主題を描くやまと絵の作例について、特に受容者や受容の場を考察するとともに、絵画の主題やモチーフが受容空間である行事や儀礼の場においていかに機能していたのかを分析する必要性を認識した。

## 2. 研究の目的

本研究では、大画面の「やまと絵」が成立した中世初期の時代から国家的な歴史画を描いていくことになる「日本画」に至るまで、「日本的なもの」として受容されてきた美術作品について、その享受された場や機能について再検討してきた。特に、中国や朝鮮(あるいは、西洋)に起源を持ちながらも、変容を遂げて日本的な風土に根付いていく過程について、享受者や享受の場との関わりという視点から見直すことが本研究の目的である。特に障壁画に焦点を当て、西欧のタブローとは異なる形態を持つ東アジアに特徴的な大画面の絵画作品が、それぞれの建築空間においてどのような機能を担っていたのか、ということを行行事や儀礼の空間の特質とともに明らかにすることを目指した。本研究は科研費補助金「若手研究(B)」(2015-2018)と並行して行う研究である。

## 3. 研究の方法

やまと絵や日本画など、日本的な美術がどのように成立し、どのように享受されたのか、ということ明らかにするために、美術自体の様式や描かれた主題・モチーフを東アジア的な文脈のなかに据えて考えることに加え、美術史、歴史、芸能史、文学、美学、建築史など既存の分野間を越えた領域横断的な視点から、つまりそれらが置かれた「場」や儀礼との関わりをなから総合的な分析を行ってきた。やまと絵や日本画を国際的に共同研究することは、このような作例が中国大陸や朝鮮半島の影響を受け一方で、日本的な主題として古くから交易を通して東アジアに流通し受容されてきたことに加え、近代以降は欧米のコレクターにも好まれて収集されたことから国外の博物館や美術館に所蔵されているため、それらを調査することが喫緊の作業となった。特に、本研究においてはいかに日本の花鳥画が朝鮮王朝において受容され、近代に至っても形を変えつつ継続され、再編されていったのかということを図像的な分析から明らかにすることを目指していたため、研究期間中には海外共同研究者とともにこれまで未公開の花鳥画作品の調査や撮影を中心として行った。在外研究として、ソウル大学校奎章閣韓国額研究院に一月(2018年3月)および東アジアに関する文献を包括的に所蔵するハーバード・イェンチン研究所(2018年8月-2019年3月)の図書館を中心に資料収集を行いつつ、現地において調査や撮影を行った。

## 4. 研究成果

### 1) 名所絵について

「若手研究(B)」においても、やまと絵屏風に写し取られた自然風景に介在する和歌の存在について考察を行ってきたが、国際共同研究では、特に歌枕を絵画化した「名所絵」に焦点を当て、歌枕の絵画化の過程において内裏で編纂された名所和歌がカノンとして参照された可能性について指摘した(「再生される名所絵」東京大学東洋文化研究所、2018年12月)。

さらに国際共同研究では、隣接分野である建築史・都市史の研究者の協力を得て、古来より和歌に詠まれる「名所」が、時代や受容層とともにいかに変容していったのか検討を重ねた。2018年7月には「名所について再考する 都市・建築・美術の磁場としての日本風景論」と題して京都工芸繊維大学にて、同年10月には"Reconceptualizing Meisho: Topography, Memory, and Representation"と題してハーバード大学在外研究期間中に共同研究のメリッサ・マコーミック氏とともに国際シンポジウムを主催した。後者においては、前者における総合討論の結果を受け、より具体的に、「土地性」「表象(表現・再現・記録・描写など)」「記憶」という三つの視座から名所について議論した。は、ある土地の自然の地形や地勢などの風景から人為的な産物に至るまで、「名所」が「などころ」たる所以を問う、は、座敷を彩る襖、名所を集めた案内本(名所記)や近代の写真・映像に至るまでさまざまなメディアから問い直す、は名所がどのように継承され人々の間で記憶されてきたのか、土地の記憶を紐解く作業から近代以降の文化財・文化遺産の問題まで、ある場所がある時代にある人々によって「名」を与えられ守られていくなかで特別な場になっていく行為そのものについて考察を行った。

## 2) 明治期の「歴史画」の受容空間と図案について

明治期の日本画を中心に、特に明治期の「歴史画」の概念について、東京大学駒場博物館所蔵、第一高等学校伝来の日本画を継続して考察を行った。開校間もない東京美術学校に関わりの深い画家たちによって描かれたこれらの歴史画は、一高より発注を受け、アーネスト・フェノロサや岡倉覚三の目指した西洋美術のジャンルにおいて高いヒエラルキーをもつ「歴史画」が日本に移入されたことを例示するごく初期の作品群であることを論じた。その成果については、ヨーロッパにおいて三年に一度開催される日本研究に関する学会(EAJS)において、本大会の「視覚芸術」セッションのテーマであった「マテリアリティー」という観点から一高伝来の「歴史画」について報告を行った(2017年9月)。歴史的人物像、特に南朝方の護良親王や楠木正成が再評価され絵画化されていく思想的背景について考察するとともに、一高の歴史画がいわゆる西洋より移入された思想や技法を駆使することによって「国民的主題」へと昇華し、公的な空間へ展示されるべき大画面のマテリアリティーを保有するべく制作された可能性について指摘した。また2017年10月から12月にかけては、本研究の成果を広く公開する展覧会を東京大学駒場博物館にて担当し、シンポジウムを開催、駒場祭においては一般の方向けの公開講座も行った。

## 3) 東アジアにおける花鳥画の受容と変容について

「やまと絵」や「日本画」の主題として描かれる「松」や「鶴」を描く花鳥画の系譜について研究を進めた。契機は「研究活動スタート支援」で行った調査の際に出会った韓国国立古宮博物館に所蔵される日本人画家の描く「松鶴図」である。本主題については中国起源であるにも関わらず、そのイメージの持つ吉祥性から東アジア文化圏において共有される図像であり、16-17世紀になると、贈答品としての価値も付加され、特に日本で制作された花鳥を描く金屏風は中国や朝鮮にも送られ重宝されたことも知られている。本研究では、これらの花鳥を描く金屏風が植民地朝鮮の宮廷において日本画家によっても依然として描かれた実態を明らかにした。

一点目としては、上述の「松鶴図」を文献上によってのみ知られていた天草神来が徳寿宮の障壁画として描いた「松鶴図」である可能性を指摘し、二点目としては、南画家として活躍していた二人の画家、佐久間鐵園と益頭峻南による作品制作が「東洋画」を意識したものであったことを論じた。これらの図像分析を通して、主題とモチーフは東アジアにおいて共有されるものでありながら、朝鮮の宮廷絵画の伝統に根差した「十生図屏風」の図様としても解釈可能であったことを指摘した。東アジアを貫く主題やモチーフにより「東洋画」を創出することで共通の土壌を作り出した当時の政治的背景を明らかにした。

さらに、本研究の過程で2017年9月に米国のオハイオ州のデイトン美術館において、これまで清時代の絵画とされてきた作品を調査する機会を得た。共同研究者のKim Soojin氏にも同行を依頼し調査を行った結果、本作品が清時代の中国絵画ではなく、朝鮮の宮廷をかつて飾っていた朝鮮絵画であるという結論に至った。本作品に使用されている技法は、朝鮮においては珍しい金箔を押しした金屏風であることも、日朝間の影響関係を示す興味深い事例であるため、今後の課題としたいと思っている。

本研究については、デイトン美術館での調査の後、オハイオ大学にて報告を行い、論文として東京大学東洋文化研究所紀要に投稿した(2018年3月)。本作品の発見とその意義については、韓国在外文化財財団にて報告を行い、現在韓国美術史の研究者の間で調査が進められるなか、本年度中には韓国に一時的に里帰りし韓国在外文化財財団の助成により修復を経て、公開が予定されている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

(1) 井戸美里「『歴史画』における有職故実と図案教育 ―一高伝来の『歴史画』をめぐる―」『五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要』25号、13-40頁、2018年11月〔査読有り〕

(2) IDO Misato, The Space and Liminality of Folding Screens: Iconography of the Sea and Pine Tree, Studies in Japanese Literature and Culture, pp.63-77, 2018〔査読有り〕

(3) 井戸美里「歴史画の誕生 歴史教育のための一高絵画」横須賀美術館特別展図録『集え！英雄豪傑たち 浮世絵、近代日本画にみるヒーローたち』6-11頁、2018年4月

(4) 井戸美里「『東洋画』としての花鳥図 十九-二十世紀初頭の朝鮮の宮廷における日本人画家の活動を通して」『東洋文化研究所紀要』第173冊、25-69頁、東京大学東洋文化研究所、2018年3月〔査読有り〕

(5) IDO Misato, Visualizing National History in Meiji Japan: The Komaba Museum Collection, University of Tokyo, Aesthetics, The Japanese Society for Aesthetics, pp.15-25, 2016〔査読有り〕

(6) 井戸美里「幸若舞曲の絵画化と受容空間に関する一考察 『曾我物語図屏風』を例として」『美学』247号、73-84頁、2015年〔査読有り〕

〔学会発表〕(計18件)

- (1) 井戸美里「再生される名所絵 障屏画に投影される和歌」シンポジウム「和漢の故事人物と自然表象」東京大学東洋文化研究所、2018年12月24日〔招待〕
- (2) IDO Misato, Reproducing and Representing Meisho: Embedded Memories in the Screen Painting of Mt. Yoshino, Reconceptualizing Meisho: Topography, Memory, and Representation (October 30, 2018)
- (3) IDO Misato, Garden and Screen Paintings: Envisioning a Landscape of Waka Poems, Kanmon nikki translation workshop III, Heidelberg University (September 16, 2018)
- (4) 井戸美里「名所絵と障壁画—和歌を喚起する風景—」国際シンポジウム「名所について再考する—都市・建築・美術の磁場としての日本風景論」京都工芸繊維大学、2018年7月20日
- (5) IDO Misato, Depicting Nature: Screen Paintings for Meeting Hall, Display as Ensemble, Sainsbury Institute for the Studies of Japanese Arts and Cultures, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (June 15, 2018)〔招待〕
- (6) 井戸美里「歴史画としての一高絵画」東京大学駒場博物館所蔵第一高等学校絵画資料修復記念 知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育」記念シンポジウム、東京大学、2017年12月2日
- (7) IDO Misato, 'Discovering "Oriental Painting": Adaptation and Reformation of Bird-and-Flower Paintings in 1890-1920' Ohio State University, 2017年9月8日〔招待〕
- (8) IDO Misato, Wall Painting and Court Spaces: Japanese Painters in the Early 20th Century Seoul, Contextualizing Gardens and Painting in East Asia II, 2017年6月5日
- (9) 井戸美里「吉野図屏風」の景観描写に関する一試論 桜に滝谷川岩の図像学」美術史学会西支部例会、京都工芸繊維大学、2017年3月18日〔査読有り〕
- (10) IDO Misato, Visualizing the Capital: Kyoto as Meisho 名所 in Premodern Japan, Asian Cities: Hubs of Interaction, Tradition and Transformation, University of Tokyo (January 11, 2017)
- (11) IDO Misato, 'Reinventing National Heroes in the 1890s: Portraits of the Southern Court as a Paragon of Fidelity,' European Association for Asian Studies (EAJS) Conference, Lisbon 2017年9月2日〔査読有り〕
- (12) IDO Misato, Beyond Style: Circulation and Transformation of the 'Bird-and-Flower Painting' in East Asia, Global Circulations and Transformations: Art and Textile in East Asia 1540-1760, 2017年7月26日
- (13) 井戸美里「『看聞日記』の室礼：屏風絵と儀式のための空間」ハイデルベルク大学（2016年10月7日）
- (14) IDO Misato, Paintings as Gardens: Everlasting Pines on Golden Sands, Contextualizing Gardens and Painting in East Asia, Kyoto Institute of Technology (July 6, 2016)
- (15) 井戸美里「東京大学駒場博物館所蔵の一高絵画資料の概要 一高伝来の「歴史画」について」松本市立旧制高等学校記念館、2016年8月28日
- (16) IDO Misato, Imagining the "Capital": Paintings and Ballads of Kyoto in the Realm of a Feudal Lord, Association for Asian Studies, Asia Annual Meeting, Kyoto (June 25, 2016)〔査読有り〕
- (17) 井戸美里「屏風の空間と境界性 花木・花鳥のイコノロジー」(国際共同研究「境界をめぐる文学」)国文学研究資料館、2016年1月9日
- (18) IDO Misato, Transcending Bird-and-Flower: An Iconological Study on Gilded Screen Paintings of Pine Trees and Birds, Symposium on Is East Asian Art History Possible?, SOAS, University of London (October 9, 2015)

〔図書〕(計2件)

- (1) 井戸美里『戦国期風俗図の文化史』吉川弘文館、2017年、全372頁
- (2) 井戸美里編『東アジアの庭園表象と建築・美術』〔編著〕昭和堂(KYOTO Design Lab Library 2)2019年、全227頁(序:i-vii頁およびChapter 4: 72-104頁)

## 6. 研究組織

研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

研究協力者氏名: Melissa McCormick

ローマ字氏名: メリッサ・マコーミック

所属研究機関名: Harvard University

部局名: East Asian Languages and Civilizations

職名：Professor

〔その他の研究協力者〕

研究協力者氏名：Kim Soojin

ローマ字氏名：キム・スジン

研究協力者氏名：Sylvia Lee

ローマ字氏名：シルビア・リー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。